

《研究ノート》

マルクス主義理論史研究の課題（Ⅰ）

——松岡・丸山・田中氏の近著によせて——

太田仁樹

目次

1. はじめに
2. 松岡利道著『ローザ・ルクセンブルク：方法・資本主義・戦争』
(以上本号)
3. 丸山敬一著『マルクス主義と民族自決権』
4. 田中良明著『バルヴスと先進国革命：第二インタナショナル・マルクス主義の到達点』
5. マルクス主義現象解明の一環としての理論史研究

1. はじめに

フランス革命200周年にあたる1989年の東欧における一連の「革命」は、20世紀の人類社会において決定的な意味をもっていたマルクス主義にとっての一つの時代が終わったことを示した。マルクス主義を「国是」とした体制からの大量の離脱とそれに続くソ連における資本主義化傾向の高まりは、既存の社会科学のパラダイムを揺るがすものであり、このような現実社会の激動は、マルクス主義という思想・運動・体制をどのように捉えるべきかという問題を、人々に改めて意識させるものであった。

あたかもこの問題に答えるかのように、1988-89年にわが国のマルクス主

義理論史研究の到達点をしめす優れた研究が公刊された。以下の3点の著作がそれである。

松岡利道著『ローザ・ルクセンブルク：方法・資本主義・戦争』

(新評論, 1988年)

丸山敬一著『マルクス主義と民族自決権』(信山社, 1989年)

田中良明著『パルヴスと先進国革命：第二インターナショナル・マルクス主義の到達点』(梓出版社, 1989年)

これらの研究の対象が第2インターナショナル期の思想家たちであることは、1989年が第2インターナショナル結成100年でもあったことを考えると、奇しき縁を感じさせるものである。だが、それらはいずれも著者たちの1960年代からの地道な研究を結実させたもので、昨日今日登場してきた際物的著作とは質を異にしている。

これらの著作は、第2インターナショナル期のマルクス主義理論の多くの興味深い問題を扱っており、読者はその叙述のなかからマルクス主義理論についてさまざまに再考を促される。本稿はそのように触発された思考の一端を書き記したものである。したがって本稿は、これらの著作の研究史上の過不足のない位置づけを企図するものでもなければ、提起された論点の正確な紹介と評価を目指すものでもない。著者たちの主張の強調点を無視することもあれば、思いがけぬ誤解も含まれているかもしれない。著者たちの理解と私のそれとの対立点のみが目立つという印象を与えるかも知れないが、あらかじめ寛恕を請う次第である。以下、私の関心にしたがった摘要とマルクス主義理論史研究上の問題点についての私見を述べてみたい。

なお、1989年には私もレーニンについての論考をまとめることができた⁽¹⁾。マルクス主義理論一般に関する私の考えも、そこに盛り込んだつもりである。本稿理解の一助として御参照いただければ幸いである。

2. 松岡利道著『ローザ・ルクセンブルク：方法・資本主義・戦争』

ローザ・ルクセンブルクは日本の知識人には馴染みのない人物ではない。その著作『資本蓄積論』や『経済学入門』あるいは書簡集は戦前すでに多くの読者を獲得していた。戦後にはとくに1960年代から70年代に左翼運動のなかでロシア・マルクス主義とは違った発想をもつルクセンブルクの議論が注目される時期があった。松岡氏はこの時代にルクセンブルクに出会った一人であり、その後の20年以上にわたる学問的検討の成果として上梓されたのが本書である。

松岡氏によると、ルクセンブルクは1960-70年代の政治的昂揚期に資本主義や現存社会主義にたいする批判のシンボルとみなされていたが、そのようなルクセンブルクの取扱においては、彼女の主張はその具体的内容において十全に検討されることがほとんどなかったし、そういう事情は現在にいたるまで克服されていないという（2頁）。

ルクセンブルク研究の歴史の出発点には、権力に到達したレーニン主義をマルクス主義の最高の到達点とみる見解が潜んでおり、その後の研究史においてはこのレーニン主義的なルクセンブルク評価を相対化する流れがあったという。しかし、「彼女の理論的・思想的重要性はレーニン相対化に留まらない現代的意義をもっている。マルクス主義総体が困難に逢着している今日、改めてローザ・ルクセンブルク再評価が試みられるのは、そこに、従来のマルクス主義にない息吹が感じられるから」（18頁）であると、松岡氏は述べている。

それでは、松岡氏のルクセンブルク再評価はどのような内容をもつものであろうか。氏自身は本書の狙いを次のように語っている。「私の場合は、ネットル以後の最も大きな問題として、ルクセンブルクの方法論と経済学との関係領域をとりあげている。これはネットルによって呈示されたルクセンブルク像

を評価したうえでその根本的弱点と思われるところを指摘し、ルクセンブルク像の本質に迫りたいからである。」(39頁) 補論をのぞく本論の構成が、「第Ⅰ編 ローザ・ルクセンブルクの思想と方法」と「第Ⅱ編 ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論」という二つの編から成っているのも、この狙いに照応したものであろう。われわれも方法論と経済学という順序で、松岡氏のルクセンブルク再評価の内容を見ていきたい。

方法論に関する検討をおこなっている第Ⅰ編は、三つの章から成っている。第1章では初期の諸著作、「われらの師の遺稿から」(1901-02年)、「カール・マルクス」(1903年)、「ラサールと革命」(1904年)、「カール・マルクスの遺稿から」(1905年)を対象として、理論と実践に関するルクセンブルクを考え方を明らかにしようとしている。第Ⅱ編とのかかわりで注目すべきは、「ルクセンブルクの意図は、経済学的理論に対する実践的視点からの批判にあり、それはまた歴史的弁証法的方法に含まれる歴史的総体性からの、または理論と実践との相互作用という視点からの体系化への批判ということになるだろう。それはまた、マルクス主義において重要なのは、体系ではなく方法であるということの主張でもあろう」(61頁)という指摘である。さらに松岡氏は、「マルクスの理論は確かに社会主義への意志のなかで実践との統一を志向するのだが、この統一というのは機械的でも調和的でもなく、相互の背離の可能性を内部に孕みながら、不断に相互作用を通じて進展する一つの過程である。ルクセンブルクのいうマルクスの方法もまた、その意味では、実践により批判されかつ実践を批判する方法として構想されているだろう」(72頁)と述べて、理論と実践との相互批判を重視している。

第2章では、理論と実践をめぐるカウツキーとメーリングの議論を検討し、第1次大戦直前のドイツ社会民主党の思想状況を浮き彫りにしようとしている。この論争の検討を通じて松岡氏は、当時のSPDの状況論議をこえて、マルクス主義そのものにかかわる次のような問題を発見している。「マルクス主義は理論的にも思想的にも革命的性格を持っていたけれども、同時

に知的体系性を持ち自己完結性を持つようとしていたのではないだろうか。あるいは学問としての完成を望む傾向を持っていたのではないだろうか。カウツキーとメーリングの対立はそこにあらわれる矛盾とその展開をSPDを舞台にして明らかにして見せたように思われる。それはまた、思想が政治の舞台で演じる矛盾の運動と考えることもできるだろう。」(109頁) 松岡氏はこの問題を「マルクス主義が一個の思想として生成、発展、停滞という運動過程を歩んだこと」(同) だとも述べている。

第3章では、ルクセンブルクに立ちかえて、後期の諸論文、「カール・マルクス」、「50年後」、「ラサールの遺産」が検討される。これらの諸論文はカウツキーとメーリングの論争のあった1913年のものであり、カウツキーに代表されるマルクス主義の停滞を批判するものであった。マルクスとラサールの対比においては、初期のマルクス優位の評価からラサール優位の評価への移行が見いだされ、そのことはルクセンブルクの帝国主義認識の成立と密接な連関を持つことが指摘されている。それとともに『資本蓄積論』の性格について興味深い次のような指摘がなされる。「彼女はイギリス先進ドイツ後進という立場から早い時期に脱却し、『資本蓄積論』ではイギリス資本主義に一定の位置付けを与えるとともに労働運動の中心地問題にも解決を与えたといえるだろう。言い換えれば彼女はマルクスの理論が必ずしも労働運動の活性化に役立たなかったという、実践における理論の限界問題にたいして、ラサールの実践をもってこたえながらも結局はマルクスの理論活動と実践的關係を現代との関係において再把握し、それを新たな現実分析のなかに包接することによってもまた説明を与えたのである。このことをなした『資本蓄積論』の存在がマルクス相対化の特徴にもなっているし、同時に『資本蓄積論』の論理的特徴をなしている。」(136頁)

第1篇の最後で、松岡氏はルクセンブルクにとっての「批判」および「自己批判」の重要性を強調し、それはプロレタリアートに対しても向けられるものであることを指摘している。

経済学的認識の検討にあてられた第Ⅱ篇は、五つの章から成っている。ここでは数篇の著作が検討されているが、その場合松岡氏は、それらに共通するルクセンブルクの資本主義観を抽出することが重要なのではなく、「個々の著作の共通点はもちろん認めるのだが、しかし、対象なり、方法の変化にルクセンブルクの議論の重要性を見るのであり、そのことによって初めてルクセンブルクの論理の意義が認識されうる」（153頁）と述べている。

第1章は、彼女の学位論文『ポーランドの産業的発展』（1898年）を分析対象としている。この著作の分析は資本主義の一般的な発展の指標を、ポーランドの経済史のなかに見いだそうという意図によって貫かれている。そして資本主義観それ自身についていえば、『資本論』の枠を大きく踏み出すものではなかったとされている。「『発展』と『蓄積論』にはその叙述において類似の点があるとしても、『資本論』理解という基本問題には大きな差がある」（157頁）という指摘が、ルクセンブルクの経済学的認識の出発点の検討においてなされている。

第2章では、修正主義論争が検討対象となり、ベルンシュタイン、パルヴス、カウツキーとともにルクセンブルクによるベルンシュタイン批判の1898年9月の諸論文（後に『社会改良か革命か』の第1部）が分析されている。この著作における彼女の問題意識は「崩壊論」の再構築であり、二つの視角からこの作業がおこなわれているという。一つは「無政府性→崩壊」という視角であり、その論理のなかには信用制度の諸機能や企業家連合が組み込まれている。いま一つは世界市場の完成状態によって資本主義の発展段階を画し、そのことによって恐慌の形態変化を捉えるという視角である。第1の視角が基本的なものであり、第2の視角は第1の「無政府性→崩壊」視角に「包接」されている。しかし、この二つの視角は矛盾あるいは齟齬を孕むものであったと松岡氏は指摘し、このような問題の登場は「資本主義の新たな変化を解明するために必然的に通過すべき段階であった」（185頁）とされている。またこの問題について、「ルクセンブルクの場合は、資本主義の本質

を、その固有の矛盾によって袋小路に追い込まれるという意味での、いわば『崩壊論』にもとめたのである。このことは両者の、つまり『崩壊論』と段階認識との接点を求める作業を必要とさせる。しかしこの作業はしばしば困難を伴うものである」（185頁以下）との指摘もなされている。

第3章は、ベルンシュタインによる反論を再度批判した1898-99年の諸論文（『社会改良か革命か』第2部を含む）および『社会改良か革命か』第2版（1908年）を検討している。この時期のルクセンブルクの議論は、『社会改良か革命か』第1部から『資本蓄積論』への過渡期と位置づけられている。

第4章は、『資本蓄積論』（1913年）の論理構造そのものを検討する本書のピークをなす章である。『資本蓄積論』の分析にさきだって、『民族問題と自治』（1908年）と『経済学入門』（1907-1916年）の到達点がまず確認される。とくに『経済学入門』では、恐慌の生起自体が資本主義の無政府性を示しその崩壊を論証するという側面は明らかに拒否されていること、および世界市場との関連において資本主義の終末像をいかに証明するのかという困難が孕まれていることに注目すべきであると、松岡氏は指摘している。『資本蓄積論』においては、帝国主義的諸現象のうち特に列強間の争いを、いかに資本主義の自己矛盾的本質によって解明できるかという課題が主内容となっている。その場合、『改良』以来の議論である、恐慌などの循環論的現象やカルテル・トラスト・信用などの内部構造の変化にかかわる諸現象の分析が除外されているが、それは「『資本論』相対化の努力が、『資本論』の論理のより広い資本主義の本質規定への包接という意図と結びついていたからである」（240頁）と指摘されている。また再生産表式論は、「『資本論』において資本主義の自己矛盾的本質を示す論理を生かしながら、同時に『資本論』の歴史的基盤である19世紀半ばの自由貿易時代を相対化する論理を模索するという極めて難しい課題に挑戦したものといえよう」とその性格づけがなされている。

以上のような課題設定と論理によって獲得されたルクセンブルクの帝国主

義認識は次のようにまとめられている。「彼女の帝国主義認識の特徴として、①資本蓄積過程の重層的把握と非資本主義領域の被抑圧の状況の叙述に大きな比重があること、②資本主義の自己矛盾的本性を列強間の勢力圏争いに見るために、事実上の資本主義全面化を想定していないこと、しかし、③その様な認識の存在にもかかわらず、表式論的次元の実現問題として全体が把握され問題が単純化され、——それは資本の自己制約的性格を示すという意図と帝国主義の必然性を示す意図とに由来するのであるが——、資本主義の全面化傾向を強く主張する文脈が形成されていること、などを挙げる事が出来るだろう。」(248頁)

第5章は、第1次大戦勃発後の著作『社会民主党の危機』(1915年)を分析したものである。『危機』の論理は『資本蓄積論』のような抽象的・一般的なレベルのものではなく、理論と実践との接点を求めて描かれたものであるとその差異が指摘されている。『危機』では戦争という具体的・歴史的現象の必然性を論証することがテーマであり、そのために独自の諸契機が駆使されている。しかし、「その戦争の『歴史的客観的意味を突きつめる』と、資本主義の自己矛盾的本性をあらわす『資本蓄積論』の論理がベースにある」と指摘されている。資本主義の理論的認識については、『資本蓄積論』がその到達点を示しており、『危機』は具体的・歴史的現象の分析への適用であるとの理解であろう。最後に第1編の末尾と同様、『危機』の戦争分析は当時のプロレタリアートの自己批判という目的をもってなされたことが強調されて分析は終了する。

以上がこの著作の本論の概観であるが、全編を貫くのは松岡氏のルクセンブルクに対する強いシンパシーである。最初にみたように、松岡氏はルクセンブルク研究は「レーニン相対化に留まらない現代的意義をもっている」ことを強調されていた。では、この「レーニン相対化に留まらない現代的意義」の内容は如何なるものか。「はしがき」で「私はローザ・ルクセンブルク

の現代的意義は、その方法論においてもっともよく示されていると考えている」（3頁）と松岡氏は述べていた。また、「マルクスの全体系そのものを歴史過程のなかに位置づけ、従って自らをも、プロレタリアートをも絶対化しないところに、ルクセンブルクの方法の持つ今日の重要性がある」（72頁）と、方法の中身について述べていた。第Ⅰ篇末尾の「ルクセンブルクの場合はマルクスの普遍性を批判的方法に求めたのであり、この結果として、その後マルクス主義がカウツキー的な意味で党内の支配的理論に押し上げられたときのそれにたいする批判的視点を堅持することが出来たのである」（147頁）という指摘も同様の趣旨であると考えられる。「批判的方法」こそがルクセンブルクの本質であり、そこに現代的意義を見出すというのが、松岡氏のルクセンブルク論の核心とあってよいであろう。

この現代的意義の把握には、松岡氏のマルクス主義理論史研究についての考え方がよく現れている。「はしがき」における「第2インター期の全期間がマルクス主義の生成から分解への1サイクルをなすものと捉え、その全過程の変化の内にマルクス主義の諸可能性をさぐろうとした」（3頁）という発言を、第2章における「マルクス主義が一個の思想として生成、発展、停滞という運動過程を歩んだ」という認識、さらに「マルクス主義は理論的にも思想的にも革命的性格を持っていたけれども、同時に知的体系性を持ち自己完結性を持つていたのではないだろうか、あるいは学問としての完成を望む傾向を持っていたのではないだろうか」（109頁）という叙述とあわせて考えるなら、カウツキーを代表とするSPD主流の傾向を現代に至るまでの正統的マルクス主義の硬直性と重ねあわせ、ルクセンブルクの主流派批判を現代におけるマルクス主義の再生の動きと重ねて考えているとも思われる。そして、その議論の中心には「知的体系性」、「学問としての完成」への松岡氏自身の否定的評価があるといつてよいであろう。

このように考えてくると、第Ⅰ篇と第Ⅱ篇との関連についても理解が進む。第Ⅰ篇は方法論をあつかったものであるが、とくに第2章において、マ

ルクス主義が「生成，発展，停滞という運動過程」を経たこと，あるいは「知的体系性を持ち自己完結性を持つようとしていた」ことを，メーリングを批判する主流派の分析を通じて明らかにし，第1章と第3章においては，主流派に対して最も鋭い批判をおこなったと見なされるルクセンブルクの一貫した思想的本質を知的体系性と学問的完成への「批判的方法」として摘出している。第Ⅰ篇の本書における意義はこの「批判的方法」の発見ということに尽きている。松岡氏はこの「批判的方法」に現代的意義を認めて，そこに自らの立場を重ねておられるようである。

第Ⅱ篇の本書における意義も第Ⅰ篇についての上述の理解を踏まえると明らかになる。『資本蓄積論』を頂点とするルクセンブルクの経済学的認識を検討して，彼女の批判的方法が経済学の領域でどのように発揮されているのかを解明すること，これが第Ⅱ篇の本書における意義であろう。松岡氏はその研究生生活をルクセンブルクの経済学的認識の検討から始められたが，彼女の言説のなかから何らかの結論的諸命題を取り出してその現代的意義を提示するという形で研究をまとめられるのではなく，「批判的方法」あるいは態度という彼女の姿勢を継承すべき価値あるものと捉え，経済学的認識の変化をそのような態度の具体的現れとして捉え返すことで，彼女の経済学的認識を研究することの現代的意義を見いだしておられるようである。

「現代的意義」に対するこのような強いこだわりには，私は違和感を感じざるをえない。だが，もし「現代的意義」として掬い取られたものが研究対象の理解を促進するものであれば，そのような研究姿勢にも意義があることを認めるのにやぶさかではない。ここでは，ルクセンブルクの「批判的方法」が如何なるものであるかについて，今すこし考えてみたい。

まず，本書においては「批判」とか「自己批判」とかいうタームがキーワードとして頻繁に用いられているが，理論と実践の関連にかかわって用いられている「批判」の意味と既成の理論を理論のレベルで「批判」すること

とは区別されねばならない。松岡氏はこの両種の批判を区別することなく理解されているようにおもわれる。第Ⅰ篇では主流派の理論偏重を批判するものとしての実践の意義が明らかにされ、またプロレタリアートの行動をも批判する彼女の姿勢が強調されている。その一方で、とくに『資本蓄積論』の検討をピークとする第Ⅱ篇の分析では、『資本論』という理論そのものの理論的批判が問題となっている。だが、この第Ⅱ部での批判は第Ⅰ部で問題となっている批判とは異なった性質のものである、と私には思われるのである。

私が問題にしたいのは、ルクセンブルクの経済学的認識とくに『資本論』に対する彼女の理論的批判に関するものである。

『資本蓄積論』と『資本論』の関係について、松岡氏は「『資本論』相対化の努力が、『資本論』の論理のより広い資本主義の本質規定への包接という意図と結びついていた」と評価しているが、『資本蓄積論』による『資本論』の「相対化」とはどのような意味なのか、また『資本蓄積論』を「『資本論』の論理のより広い資本主義の本質規定への包接」の試みと捉えることは妥当であろうか、という疑問が浮かんでくる。

まず「相対化」ということで何を意味するかということが問題になる。この曖昧な表現は理論史・思想史研究のなかでよく用いられるタームであるが、その文脈のなかでどのような含意をもつのかをそのつど確定していかねば、意味不明のままである。『資本蓄積論』が『資本論』の「相対化」であると松岡氏がいう場合、『資本蓄積論』第31章の蓄積の二つの側面についての有名な叙述を念頭に置いている。蓄積の第1の側面は資本主義の領域に関するものであり、そこでは商品交換と「平和・所有・平等」が支配している。この領域では「科学的分析の鋭い分析」(=『資本論』)が妥当する。第2の側面は資本主義と非資本主義との間で行われるもので、その舞台は世界劇場である。この領域では『資本論』はその妥当性を失う。松岡氏は「ルクセンブルクが『資本論』に見たのは、蓄積の第1の場面であり、その意味で『資

本論』の論理を相対化したことがわかる」(244頁)と指摘されている。「相対化」はここでは『資本論』の論理の妥当する範囲の限定の意味で用いられている。ルクセンブルクは『資本論』を基本的には継承したうえで、その妥当性を限定したという理解であろう。

だが私には『資本蓄積論』のルクセンブルクが『資本論』を基本的に継承しているとは思えない。そこでの『資本論』に対する評価は、つきつめるならば全面的な否定ではないのか、というのが私の理解である。『資本蓄積論』は全3篇32章構成であるが、ルクセンブルク自身の資本主義論を展開しているのは第3篇(第25～32章)である。そこでの叙述を導いている基本的な論理は、第29章末尾近くの次の章句に端的に表現されている。

「歴史的にとらえれば、資本蓄積とは資本主義的生産様式と前資本主義的生産様式とのあいだにおこなわれる質料変換の過程である。前資本主義的生産様式なしには資本の蓄積はおこなわれえないが、しかし蓄積なるものは、この面から考えれば、前資本主義的生産様式の咀嚼であり消化である。」⁽²⁾

資本主義的生産様式による前資本主義的生産様式の咀嚼・消化こそが資本蓄積であるというこの論理にしたがえば、資本主義的生産様式の全一的支配という想定のもとに展開された『資本論』の論理はその意義を全く失わざるをえない。事実、第1篇と第2篇における再生産表式に関する長大な議論は、『資本論』のような想定(=資本主義的生産様式の全一的な支配)のもとでは、蓄積=拡大再生産が不可能なことを、『資本論』にそくして論証しようという企図のもとでおこなわれたものである。そこでの議論は『資本論』から妥当性のある何らかの命題を取り出すということが目的ではなく、『資本論』の想定に従えば背理以外は導き出すことができないということを示すことが目的であった(したがって表式分析から帝国主義的対外進出の論理を導いているという通説的理解はルクセンブルク理解としては誤りである)。

第26章の冒頭の「われわれは、マルクスが首尾一貫してかつ意識的に『資本論』全3巻における彼の分析の理論的前提として、資本主義的生産様式の

全般的かつ排他的な支配を想定しているのを見た。かような条件のもとでは、もちろん、表式におけるのと同じく、資本家および労働者以外には何らの社会階級もない。……かような前提は理論上の応急策であって、現実においては、資本主義的生産の排他的支配をともなう自足的な資本主義社会なるものは、どこにも存在しなかったし、存在してもいない⁽³⁾という叙述は、ルクセンブルクの『資本論』に対する評価を示している。『資本論』は現実分析の論理を提供することができなかったという、否定的な評価が見られるのである。

だが、松岡氏は同じページにある次のような叙述をもって反論されるかも知れない。そこには「だがそれは、それが問題そのものの諸条件を変えないでこれをその純粋性において叙述するのに役立つ場合には、まったく差し支えない理論的応急策なのである⁽⁴⁾」と述べられている。ルクセンブルクは『資本論』の意義をやはり認めているのではないかと、ここでの叙述はたしかに第31章の蓄積の2側面論につながるように見える。ルクセンブルク自身もそう考えていたのかも知れない。

しかし問題は、論理として第29章の資本蓄積観と第31章のそれとが整合するの否かである。第29章の資本蓄積観が第3篇の主調をなしていることについては、私は自著で明らかにしている⁽⁵⁾。問題は、その主調的論理と『資本論』の意義を認めている第31章の論理がどうつながり得るのかということであるといってもよい。私は、「資本蓄積とは資本主義的生産様式による前資本主義的生産様式の咀嚼・消化である」という論理は、資本主義的生産様式の全一的支配を前提とする『資本論』の論理とはそのままでは整合的に連結することはできないと考える。ルクセンブルクのこの主調的論理は、資本主義的生産様式の全一的支配の内部での蓄積の論理を展開するマルクスの論理を包摂しえないものであるからである。

したがって、『資本蓄積論』のなかで『資本論』の論理が限定的であるとはいえ妥当する領域があると述べているのはリップ・サーヴィス以上のもので

はない、あるいは「偉大なマルクス」に対する明示的な全面的否定をおこなうことへのためらいを示すものでしかない、と考えられる。ルクセンブルク自身が主観的にどう考えていようと、その主調的論理は『資本論』とは整合的に連結しえないものであり、『資本蓄積論』は『資本論』の相対化ではなく、『資本論』とは異なった資本主義社会発展の把握の試みであったと性格づけるのが妥当であろう。したがって、『資本蓄積論』を『資本論』の論理のより広い資本主義の本質規定への包接」の試みと捉えることも妥当ではないと思われる。

では、『資本蓄積論』の理論的到達点はどのように評価されるであろうか。『資本蓄積論』におけるルクセンブルク自身の資本主義発展の論理の第1の特徴は、過度の単純明快さである。彼女の展開する論理は、第29章の「資本蓄積とは資本主義的生産様式による前資本主義的生産様式の咀嚼・消化である」という観点にたって歴史的な経験的事象を整理したものにはすぎない。第2に彼女の『資本論』否定論は彼女の立論そのものを掘り崩していることが問題となる。それは「資本主義的生産様式」とは如何なるものであるかについての彼女自身の理論的な解明が要請されてくるということにかかわる。

『資本論』でマルクスは資本主義的生産様式について彼自身の立場から理論的な解明をおこなっているが、それはルクセンブルクのいう「全一的支配」という想定にたっておこなわれたものである。彼女はそのような『資本論』の前提を拒否しているのであるから、マルクス的な「資本主義的生産様式」概念を用いることはできないはずである。しかし、彼女の資本蓄積観は、マルクス的な「資本主義的生産様式」概念を無批判に借用し、それと「前資本主義的生産様式」との関係の問題にするものになっている。結局、ルクセンブルクは「資本蓄積とは資本主義的生産様式による前資本主義的生産様式の咀嚼・消化である」という命題を彼女自身の理論的な立脚点の上に構築することをおこなっていないのである。その他の「剰余価値」などの概念も、当然自らの立脚点にたった概念化を経なければ用いることのできない

はずのものであるが、彼女は『資本論』から無批判にこれを借用している。彼女の論述は、経験的な事象の整理であるから納得しやすいものであるが、彼女自身の理論的な立脚点は全く脆弱なものである。彼女が用いている諸概念を供給している『資本論』は、彼女自身によって「非現実的」なものであることが暴露されているのだから。彼女は、『資本論』とは別個の自分自身の足場を固めることなく『資本論』を撃つことで、結局は自らの足場を掘り崩している。

したがって、『資本蓄積論』は、主流派マルクス主義者の論理にたいする不満の鋭い表現という意義はあるとしても、その全体としての論理は非概念的なものにとどまらざるをえなかった。よくもちあげられる中心資本主義国と周辺部の把握についても、理論的に継承すべき何らかの論理を提示しているものではない。ルクセンブルクの視点は、資本主義的生産様式と前資本主義的生産様式の「接点」に固着しており、周辺部の変容を捉える論理を欠いている⁽⁶⁾。

『資本蓄積論』は社会化論的帝国主義論のように『資本論』の継承という形をとったものではないのだから、その理論的到達度は、ヒルファディング『金融資本論』やレーニン『帝国主義論』と比較されるべきではなく、『資本論』との比較によって測られるべきであろう。そして資本主義の原理的把握という点において、『資本蓄積論』は『資本論』よりもはるかに後退していることは否めない。松岡氏の表現を借りるなら「学問としての完成度」が低いのである。

しかし松岡氏の狙いは、ルクセンブルクの言説のなかから何らかの理論的命題をとりだして、学説史的位置づけをおこなったり、その今日的妥当性を主張することではなかった。すでに見たように、松岡氏はルクセンブルクの現代的意義を「批判的方法」ということに見いだされている。氏の場合、それは「マルクス主義が一個の思想として生成、発展、停滞という運動過程を歩んだ」ことに対する批判を意味しているようである。そのことは、「知的体

系性を持ち自己完結性を持つとしていた」こと、あるいは「学問としての完成を望む傾向を持っていた」ことに対する批判とも言われていた。理論の領域でより高いレベルの展開をおこなうとか体系をより完成したものに練り上げるといふ営みは、評価されるものではなくむしろ思想としては「停滞」を意味すると言われるのである。理論史研究の通例の考え方からみると、このような松岡氏の主張は奇異な感じをもたらす。むしろ、理論史研究についての通俗的な了解を批判することを、松岡氏は狙っているのかも知れない。だが、このことは、ルクセンブルクの経済学的認識を検討すれば積極的な意味で継承すべき論理はほとんど見あたらない⁽⁷⁾ということ、逆に主張していることにもなる。

しかし、『資本論』に対する否定が歴史的・経験的事実の観察から得られた「資本蓄積とは前資本主義的生産様式の咀嚼・消化」という観点のみによる論述しか結果しなかったことを考えるなら、学問的完成を拒否することがそれほど現代的な意義を持つことなのだろうか。また、本当にルクセンブルクが学問的完成を批判することを目的としていたならば、それは理論と実践の相互批判ではなく、学問的完成一般あるいは理論一般の否定にすぎないものである。松岡氏の評価基準はそこまでを含意するのであろうか。だとすれば「学問的完成」は何故批判されるべきなのか、氏自身による説明がなされるべきであろう。

松岡氏によって描かれたルクセンブルク像は、理論一般の拒否ともいう姿を表しているが、現実のルクセンブルクは学問的完成一般、理論一般を意識的に拒否しているようにはみえない。しかし、彼女は「理論は理論によってしか批判されることはない」ということについての認識が薄いように思われる。そのことは、『資本蓄積論』において安直に『資本論』の概念を借用していることに現れている。松岡氏が、「知的体系性」・「自己完結性」・「学問的完成」の批判者としてルクセンブルクを描くのも全く無根拠とはいえない。しかし、それは彼女の意識的な態度ではなく、彼女の理論的な思考の粘

着力の欠如あるいは理論的批判力の弱さを示しているのではないだろうか。

『資本蓄積論』には、『資本論』にかわる学問的完成の意欲がみられるのである。しかしその到達度は低かった。学問的完成度が低いことと学問的完成を自覚的に拒否することは区別されねばならない。学問的完成度の低さを、学問的完成能力の低さにはなく、学問的完成に対する「批判」のあらわれと見なすことは、ルクセンブルクを救済することにはならない。

ルクセンブルクの「批判的方法」については、プロレタリアートの実践に関連して松岡氏は次のような指摘もおこなっている。

「彼女の方法を批判理論としてよく特徴づけているのは、全てが批判の対象になりうるということである。ルクセンブルクのあげるマルクス主義の二つの要素は理論と実践であり、この二つの要素の相互関係がマルクス主義の本質をなしているのであるが、その相互関係はプロレタリアートという社会的・歴史的存在によって媒介されている。このように決定的な役割を担っているプロレタリアートにたいし、彼女はその役割を否定しはしないが、しかし戦争勃発とそれへの協力という事態のもとでは、このプロレタリアートにたいし絶望し、また、その絶望を希望に転化するための最後の呼びかけをおこなわざるをえなかった。『社会主義か野蛮か』という定式はいわばプロレタリアートにむけられた決定的な批判である。こうしてルクセンブルクの批判の対象にはなんの制約もないことがわかる」(146頁)。

ここでの批判の対象はプロレタリアートという実在であって何らかの理論ではない。またここでいう批判とは、「叱正」という以上の意味をもっていない。したがって理論史研究の課題を問題とする本稿にあっては、あえて取り上げる必要のない問題かも知れない。しかし、ここには理論史的検討にとっても看過しえない問題が孕まれているように思われる。プロレタリアートの把握の問題である。歴史の発展とくに資本主義社会から未来社会への移行のなかで特権的な役割を担うものであるとプロレタリアートを把握するのは、

マルクス主義の本質的特徴であり、このような把握は『資本論』を頂点とする資本主義社会の理論的分析によって論証がなされているのである。大戦の勃発によってプロレタリアートが戦争協力に傾いたという事態は、既成の理論に対してどのような問題を投げかけていたのだろうか。それは既成の理論によるプロレタリアート把握が誤っていた、あるいは不十分であった、ということの意味するのではないのか。したがって、既成の理論に対する見直しあるいは理論的な批判が要請されていたのではないのか。例えば、レーニンの労働貴族論は、その説得性はともかく、何故労働者階級の相当数が戦争協力をおこなうに至ったのかを理論的に明らかにしようとした試みであろう。松岡氏の描くルクセンブルクにはそのような理論的な営為として問題意識さえも見いだせない。伝統的理論によって特権的な位置を与えられていたプロレタリアートが理論どおりに行動しなかったことを叱るのみである。ルクセンブルクのプロレタリアート批判は、既成理論に対する理論的批判を意味するものでもなければ、既成理論を信奉していた自己を批判するものでもない。彼女の批判は理論的批判たりえていないのである。

今日的立場に立つならば、プロレタリアートが資本主義的社会秩序に対して革命的であるのは極めて稀な場合であるということの認識は不可欠であろう。ルクセンブルクにその認識を求めることはないものねだりかもしれないし、そのようなプロレタリアート観を歴史的な存在である彼女に求めることは理論史研究の立場ではない。しかし松岡氏は、彼女の「批判的方法」は現代的意義を持つと主張されるのであるから、松岡氏に対してはないものねだりとはいえないだろう。伝統的理論の理論としての破綻を認めることから「批判」は始まるのではないのか。プロレタリアートに対する特権的地位の付与は、マルクス主義の基本的特徴であるから、それを批判するものはマルクス主義者とはいえない。ルクセンブルクも、マルクス主義の枠内にとどまったといえよう。だとすれば、彼女は伝統的教条を墨守したのであって、「全てが批判の対象になりうる」というのは彼女の思考の特徴づけとしては

ふさわしくない。彼女のプロレタリアート批判は、彼女が理論的批判の課題に対して鈍感であったことを示している。

理論史研究の立場から見れば松岡氏の描くルクセンブルクは、①その時代の現実を的確に捉えることができなくなった既存の理論体系に大きな違和感を抱いているが、②既存理論を継承・発展させて現実を解明しようとするともなく、③既存理論の難点の根拠を理論的に剔抉することを通じて自ら対抗的な理論を構築することもできず、④既存理論内の諸概念を用いて中途半端な議論をしている、というものである。③と④については異論があるかもしれないが、その異論の主張にはルクセンブルクの言説に対する理論レベルでの分析による論証が必要であろう。ルクセンブルクの「批判的方法」とは、①のような違和感あるいは不満の表現以上のものを意味しないのである。その意味でそれはせいぜい「批判的傾向」と呼ばれるべきものである。

マルクス主義理論史における、ルクセンブルクの存在は、マルクス主義理論の欠落部分あるいは難点は何であったのかを照らし出すものとしての意味を持つものであろう。ルクセンブルク研究は①の彼女の抱いた違和感や不満の意味を理論的に確定する方向で深化されるべきであろう。それは彼女の言説や態度のなかに直接的な「諸可能性」や「現代的意義」をもとめる方向とは全く別の方向であろう。松岡氏の著作は彼女の提起した何らかの命題のなかに現代的意義を探ろうとする衝動からは自由であるが、彼女のなかに是が非でも現代的意義を見出そうとすることにより、理論一般に対する否定が何らかの意味をもちうるという主張に陥っているといえよう。「学問的完成」一般に対する批判が何故意義あることなのか、十分な説明がやはり望まれるのである。

註

- (1) 太田仁樹『レーニンの経済学』御茶の水書房, 1989年。
- (2) *Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*, Bd. 5, Berlin, 1975 (1913), S. 364. 長谷部文雄訳『資本蓄積論』(下), 青木書店, 1955年, 500頁。
- (3) *op. cit.*, S. 297. 訳, 407頁。
- (4) *ibid.* 同。
- (5) 太田, 前掲書, 補論2。
- (6) 太田, 前掲書, 238-239頁。
- (7) ルクセンブルクの議論を狭義の経済理論として捉え, そのレベルでポジティブなものを掬いとすることも可能である。マルクスからカレツキを經由しポスト・ケインジアンにつながる経済理論の動態化の流れのなかで彼女の理論を位置づけようとする研究方向もある。わが国では, 星川順一「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』の論理構成について」(『経済学雑誌』(大阪市大)第71巻第1号, 1974年)が, そのような方向を示している。